

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 おぼいし まり
尾葉石 真理

本論文は、『新古今集』の時代、およびその影響下にあった時代のうち、藤原定家・村上源氏中院流・六条藤家の和歌を中心に分析・考察した論文である。序章・終章のほか、本論は三章八節から構成されている。

第一章は藤原定家の和歌について考察する。第一節は定家の『正治初度百首』の詠につき、漢詩文をどのように取り入れたかを論じる。単なるその翻案ではなく、漢詩文自体にかなり踏み込んだ解釈を行い、物語や他の古歌などとも関連づけながら柔軟に摂取している点で、他歌人はもとより定家の詠作史の中でも特異なものとして位置づけられることを明らかにした。第二節は定家の同百首の『源氏物語』を摂取した和歌を取り上げて、それらが、従来言われているように観念的なものではなく、閑居の孤独感や旅中の寂寥など現実的な心情をも組み入れたものであると指摘する。第二章は、村上源氏の源通親・通光親子の詠歌活動を扱う。第一節は通親の『正治初度百首』詠を対象に、『万葉集』・漢詩文・『源氏物語』の摂取の特徴を分析し、そこに合理性や具体性を求める特徴を見いだす。またそれが彼の官人としての言動にも通じていること、および後世にも影響を及ぼしていることを例証している。第二節は通親の『万葉集』摂取の全体像を考察し、それが自家への意識や祝賀性などの歴史認識を包含していると分析する。第三節は、源通光の和歌を分析し、趣向よりも表現の独自性を追求する点で、従来同類視された藤原秀能とは相違し、父通親と共通することを指摘する。第三章は六条藤家とその影響を受けた歌人について論述する。第一節は藤原季経の詠歌方法につき、異質な表現どうしをつなげて新奇な趣向を求める拡張的な表現方法を認め、それゆえに御子左家歌人からは否定され、また後世、非主流派の歌人たちから一定の評価を受けた、と結論づける。第二節は、真観の作品を扱う。終始『新古今集』の和歌とその方法を尊重する詠歌態度で一貫していたことを明らかにし、表現と表現のつなげ方に独自性があるとの創見を示して、新奇さへの注目に偏っていたこれまでの真観評価を是正した。第三節は『玉葉集』が日常詠を多く含み日常性を重視していたこと、そしてそれは六条藤家の撰集意識と重なることなどを立証している。

本論文は、中世前期和歌の主流を形成する藤原定家の和歌と非主流派である村上源氏中院流および六条藤家の和歌に対して、それぞれの詠歌の方法を押さえつつ、彼らの現実意識がそこにどのように取り込まれているかなどにつき、多くの事実を明らかにし、中世和歌研究に新生面を開いている。他に取り上げるべき歌人も少なくないなど今後の課題も存するが、本審査委員会は本論文に上記のような研究史的意義を認め、博士（文学）の学位に十分値するとの結論に至った。